

## 内外交差点

# 空飛ぶクルマの未来に向けて 25年の振り返りと26~27年への展望

寶上 卓音氏（そらとぶタクシー社長） 第9/12回

2025年は、空飛ぶクルマ業界にとって非常に重要な節目の年でした。大阪・関西万博が大きなショーケースとなり、空飛ぶモビリティの実用化に向けた法整備や指針づくりが一歩前進しました。この万博を通じて、業界全体が「ショーケース期」を終え、いよいよ次の商用化フェーズへの準備段階へと移りつつあります。

目立った事柄としては、SKYDRIVEとJOBY AVIATIONのショーケース飛行ではないでしょうか。「こんなもん電動のヘリコプターやないか」と口々に言ってるおじさんが万博会場には出現していましたが、eVTOLですから「そもそも空飛ぶクルマという表現がちゃうねん」と思いながら聞いてました。とはいえそれだけインパクトのある言葉だったのでブランディングとしては非常に良かったですね。

それ以外で言えばAir Xという会社が実証実験を開始したり、すごく目立ってきてるなと思っています。彼らはITシステムの会社ですから社長は非常にITに強い感じの人ですし、航空業界という閉ざされたジャンルでもとても前向きな姿勢の方で私も大変好意的に思っております。

あとは行政なので目立つという言い方ではないですが、国土交通省は大変進捗を伸ばしたと思います。皆様は民間企業の動向しか見ることがないのでなかなか分かりづらいとは思いますが、あの国交省が良く短期間でこれだけ指針を出してくれたなと感心しました！しかも大変良い内容です。そらとぶタクシーとしてのあり方を最大限後押しできるような国家の戦略でした。

そらとぶタクシーの進捗としても人員増強はニュースにも出ていましたし、優秀な役員の獲得はメディアも興味を示してくれました。特にユニバーサルスタジオジャパンの元副社長である弊社のCFO湯浅氏の加入は大変大きな話題となりました。大きな資金が必要な以上、その資金の使途にも信頼のできる人材が必要になると実感した一年でした。

来年、つまり2026年には、これまでの法的な整備がほぼ完了し、2027年初頭には実際に空飛ぶクルマが商用運航を開始できるよう、政府も全力で動いています。し

かし、そのためには2026年中にやるべきことがまだたくさんあります。

例えば、商用化に向けた設備投資は不可欠です。離着陸ポートの整備や運用体制の確立、そしてそれを支える航空運行管理者や整備担当者といった人材の育成も現実的な課題です。私達はいわゆる先行企業になるので既存のインフラといったものに頼ることはできません。私達自身でインフラの整備もしていかななくてはならないという事が一つのポイントです。

一口に商用化に向けた設備と言っても、離着陸ポートだけではありません。離着陸ポートにはヘリパッド・航空灯火・風向指示器・航空無線などといった基本的に空港に必須と言える設備に始まり、待合室も富裕層向けなので豪華で秘匿性があり居心地の良い物を提供する必要があります。もちろんスタッフが使う施設として、管理棟のようなものも必要になり、それを運用するスタッフ、例えば運行管理者や誘導スタッフ・安全管理をするスタッフなど専門職を含めると一つのポートを運営していくだけでも数人から十数人が最低でも必要になります。当然ながら、こうした準備にはコストもかかりますが、そのリアルな部分をしっかり見据えながら進めていく必要があるでしょう。

そして2026年中には、私達そらとぶタクシーは航空会社としての地位を明確にする必要があると感じています。それにも大きな資金を投下する必要があるでしょう。

人員は揃った、関係会社も増えた、資金も少しずつ増えてきている。機体メーカーも進捗を出している。私たちのやるべきことはもう見えています。

こうして2025年を振り返り、2026年に向けた準備を経て、2027年にはいよいよ空飛ぶクルマが私たちの日常に溶け込んでいく…そんな未来が少しずつ現実になりつつあります。年末にこの一年を振り返りながら、来年以降の展望に思いを馳せて、空飛ぶモビリティの新たな時代を迎える準備を共に進めていきましょう。私たちはその業界のリーダーとなるべく覚悟をもって2026年の未来を切り開いていく所存です。

本年一年も皆様のご声援をいただき誠にありがとうございました。来年もまたどうぞよろしくお願い申し上げます。

